

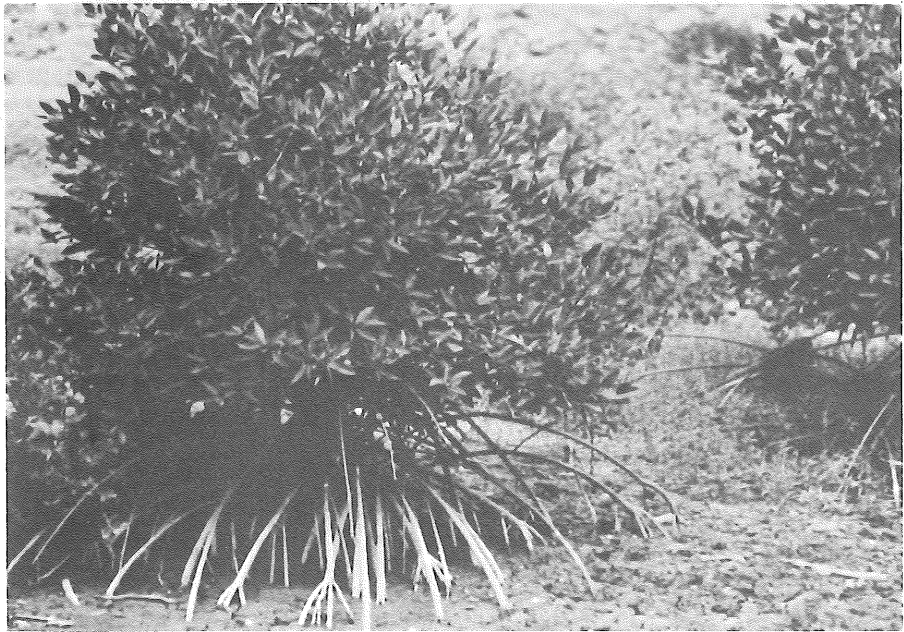
## インドネシアの水

山野井 徹\*

昭和55年6月の中旬から20日間、インドネシアのバリ島、ジャワ島、スマトラ島それにシンガポールを回ってきた。この旅行の目的はマングローブ沼の動・植物、とくに軟体動物（貝類）とマングローブ林植物の生態を調査することであった。なぜこのような調査をしたかについて最初に少しふれておきたいと思う。

日本の第三紀中新世の中頃といえ、現在の気温に比べてかなり暖かかった時代で、各地のこの時期の地層から熱帯や亜熱帯の動・植物が見つかってい

る。たとえば貝類では、テレスコピウムとかゲロイナといった現在の熱帯や亜熱帯地方の河口付近のいわゆるマングローブ沼に生育する大型の貝の仲間が、広島・岡山県や富山県で産出している。またこれらの地層から最近マングローブ林植物の花粉の化石も発見された。こうした化石とは別に、いわゆる化石土壌といわれるラテライト様の赤色土も新潟県などで見つかっている。このような第三紀の古環境をさらに詳しく研究しようとすれば、どうしても現在の熱帯地方のそれをよく知っておく必要がある。



第1図

熱帯地方の河口付近に群落を作るマングローブ植物であるヒルギの仲間（シンガポールにて）。

\* 山形大学教養部地学教室

こんなわけで、新潟大学、名古屋大学、それに富山から各1名ずつ計4名の小調査隊を作り出かけた次第である。

今回は調査の本題とははずれるが、インドネシアの水をとり上げ、見たり感じたりしたことを述べてみたい。

インドネシアの川といえば、ジャワ原人がその上流で出たり、「清き流れ……」と歌われ、ジャワ島一の長さを有するあのブンガワンソロが有名である。この川については漠然としたイメージではあるが、清き流れと歌われている川であるからには、我が国の谷川の水とまではいかないまでも、せめて最上川ぐらいの清さはあるだろうと思っていた。バリ島からジャカルタに飛ぶ途中、機上からみたこの川は、なんと我々が洪水の時目にするあの黄土色なのである。しかも乾期であるというのに。清き流れのイメージは瞬時にふっ飛ぶと同時に、こんなイメージを熱帯地方の大河にいただいていたこと自体、うっかりしていたのだと反省したり、「清き流れ」の歌詩が誤訳されていたのではないかと疑いさえした。

ジャカルタに着いた翌日、さっそくこの付近で最も大きな川であるチタルム川の河口へ陸から近づいて調査することになった。それはジャカルタから東へ60kmほど国道を走り、そこから川岸の道路に沿って河口まで行こうという計画であった。実際、国道は車も快適に進んだが川に沿う道路に入ったとたん悪道になり先が思いやられた。この道は本流に並行して流れる運河の堤を兼ねるもので、周辺にはあぜ道ぐらいしか見あたらず、恐らく、付近一帯の沖積平野の幹線道路に違いないものであった。したがってかなりの交通量があるが、それは乗り物ばかりではなく、トボトボと歩く人、天びんを肩に果物等を運ぶ人、あるいは川岸でアヒルを追う人……等、人間は絶え間なく目にはいった。他方乗り物としては、バイクや自転車が多く、ペチャと呼ばれる自転車を改造した人力車が走っていた。自動車といえばここではほとんどが日本製の小型トラックの荷台に手を加えた個人経営のバスや古い型の大型トラックの類で、いわゆる乗用車はほとんどみかけなかった。運河はその幅が約20mでやはり黄土色の水が流れていた。

こうした悪道を、胃ぶくろがねじれそうな車の振動とたち上がる砂ボコリ、そして強烈な熱気に悩ませられながら進んでいった。1時間ばかり行った所

にやや人家が密集した所があり、そこで地名を聞き地図で位置を調べた。しかし我々の車はこの悪道をまだ10km程度しか進んでいないことを知り全員がっかりさせられた。それでも気をとり直してまた前進することにした。こうした集落のある所の川辺にはいわゆる「洗い場」が必ず設けられていた。それは簡易なものであるが、中にはコンクリート製の目かくしによって、その内部が道路からは見えにくくなっているものもあった。しかし、対岸の造りはよく見え、コンクリート製の階段が広く作られていて、水量の増減に対処する構造であった。こうした洗い場は周囲の道路や家などの造りと比較して不調和なほど立派であった。おそらく運河の建設の際、公共事業として、築堤の設計の一部に組み込まれて作られたものであろう。そんな洗い場では、衣類の洗濯を始めとし、食器や食糧を洗うばかりではなく、水浴をしたり、歯をみがいたりといった姿もみられた。したがって我々の家の台所や浴室あるいは洗面所の機能を兼ねるものであり、日常生活とは切りはなせない場であることを知った。こうした洗い場の存在と機能は上記のとおりよく理解できたが、所々に奇妙な物があった。それは川岸から直角に2mばかり人が1人通れる位の幅で突き出た棧橋状の先端に、広さ1m四方、高さも1mばかりの囲いがある構造物であった。囲いの材料は、板、よしず、布等様々であるが、これが何に使われるものかは見当もつかなかった。使用目的を知るため、使用中のものはないかと車の中から注意してみることにした。しばらくは不明のまま進むと、車のかかなり前方に、1人の男が棧橋をわたり、囲いにかがみ込むのが見えた。何をしているのかまだ距離もあってわからない。なおも近づくと依然としてその動作は不明である。車がこの棧橋とすれ違い、遠ざかろうとしたとき、囲いの中から下の川面にボタリと細長い物が落下した。これが何であるか気づくのに時間はかからなかった。してみるとこの構造物は正に「かわや」なのである。今まで見てきた数多くの川に突き出した囲いは彼等のトイレであり、しかもこれが上記各種の洗い場の水と一連のものであるという事実を目の前にし、いささかぞっとさせられた。

結局この日は途中までで道が悪く引き返さざるを得なかったが、その後いくたびかこうした川の河口のマングローブ林へ立ち入り調査を行うことになった。ひざまで水につかることが多かったが、そのた

びごとにこの日の光景が思い出され、あまり気持ちのいいものではなかった。また後日ジャカルタの博物館を見学した際、市内の川岸でも同様の「洗い場」がずらりと並び、しかも同様に使用されていたのを見た。ここでは「かわや」こそないが、そこを流れる水たるや下水を集めた正にドブ川なのである。

こうした川を使用するという感覚は、今の我々日本人にはとうてい理解できるものではないが、インドネシアでは、流れる水は清いものとされていることを知った。したがってあのブンガワンソロがジャワ島で最も清き流れであることは決して誤りではなかったのである。



第2図

インドネシアの川岸に作られた「洗い場」で母親が野菜などを洗った後、子供を水浴させているところ。左側の川に突き出した囲いはいわゆる「かわや」である。この川の水は住民の生活にとって切り離すことのできない大切な流れである。